

実睿編 『地蔵菩薩靈驗記』再考：高遠説をどう止揚するか

著者	清水 邦彦
著者別表示	Shimizu Kunihiro
雑誌名	日本仏教総合研究
巻	2
号	2004
ページ	49-83
発行年	2004
URL	http://doi.org/10.24517/00051316

doi: 10.20588/nbs.2.0_49



実睿編『地蔵菩薩靈驗記』再考

——高達説をどう止揚するか——

清水邦彦

序

続群書類従に収められた、実睿編『地蔵菩薩靈驗記』(上・中巻、以下、続従本と略)は、『今昔物語集』巻十七の地蔵説話⁽¹⁾の出典とされながらも、曾我兄弟の話(中巻第十四話)があることから、大正時代以来、様々な論究があつた。真鍋広済等の尽力もあり、一九六〇年代以降、続従本を、実睿原撰本をある程度忠実に継承したテキストとする「通説」が定着してきた。が、近年、高達奈緒美によつて、続従本は一六八四年刊行『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』(古典文庫所収)を基としていたことが判明した。即ち、続従本の史料価値を高く評価した「通説」は、高達説によつて再考を余儀なくされているのである。

本稿は、「通説」を高達の新見解から見直した上で、実睿編『地蔵菩薩靈驗記』を再考することを主眼とする。

実睿編『地蔵菩薩靈驗記』再考(清水邦彦)

1. 本論の前に

続従本の問題を複雑化させている一因として、「地蔵菩薩靈驗記」という名称が普通名詞にすぎず、多種の「靈驗記」が存在することが挙げられる。

(1) 十四巻本

まず著名なものとして、古典文庫所収『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』(全十四巻、以下十四巻本と略)が挙げられる。巻一〜三が実睿編⁽²⁾、巻四以降が良観続編、とされている。巻一・二が、続従本上・中巻と同一であり、また、巻三まで実睿編とされていることから、両書の関係がこれまで取り沙汰されてきた(後述)。「良観」については、『沙石集』との類似性から、「良観房忍性」とする説もあつた⁽³⁾。しかし、『延命地蔵菩薩経和談鈔』(一六八七年成立)に「三

井寺の実睿。靈驗記をあらはし。おなじく良観。これを続編す。⁽⁴⁾とあり、『地蔵菩薩利生記』(一六八八年成立)に、「三井寺実睿の集ところ。同良観の続編せる地蔵菩薩靈驗記」⁽⁵⁾とあるゆえ、「良観」は、三井寺の僧であり、忍性とは別人であつたとすべきである。

「良観」の生没年の手がかりは、『岩船山地蔵菩薩縁起』(一七四四年成立)に、「右の御縁起は往古より当山に伝有て天和年中江州三井寺沙門良観僧都の続編せる地蔵靈驗記第九巻にもあらまし是を記せり」⁽⁶⁾とあるのみである。しかし、十四巻本には、江戸時代の表記が見られ⁽⁷⁾、内容面でも江戸時代的要素⁽⁸⁾があるため、良観は、江戸前期の僧であつたと考えられる⁽⁹⁾。

数箇所 of 版元から出版されていたことが確認されるので、「仏書中でのベストセラーに属するもの」⁽¹⁰⁾と言える。

(2) 十三巻本

十四巻本の続編者「良観」が三井寺の僧であるとすれば、別のテキストの問題が生じてくる。即ち、良弁続編十三巻本『地蔵菩薩靈驗記』の存在である。

『広益書籍目録大全』には、「十三」地蔵靈驗記へ三井実栄 元興良弁⁽¹¹⁾とあり、『密宗書籍目録』には「地蔵靈驗記へ三井寺 実栄 元興寺 良弁」撰十三⁽¹²⁾とある。このことについて、真鍋は、「十三(巻)」「十四(巻)」の誤りである可能性を示唆している⁽¹³⁾。これは、名前の類

似だけのみならず、『地蔵菩薩利生記』に、「三井寺実睿の集ところ。同良観の続編せる地蔵菩薩靈驗記。合せて。十三巻」⁽¹⁴⁾とあることによる。

しかし、良観が三井寺の僧であつたとすれば、「元興寺の良弁」⁽¹⁵⁾は別人であろう。とすると、良弁続編十三巻本は十四巻本とは別のテキストであるとする解釈が浮上する。

(3) 十二巻本

これとは別に、真鍋によつて、十二巻本の存在も示唆されている⁽¹⁶⁾。論拠は、柳枝軒発行十四巻本付録の経書目録の中に、「地蔵靈驗記 十二」とあることである。

十二巻本の存在を示す史料はこれだけではない。『秘密安心往生要集』下巻「三井寺の上座実叡と申すは、(略)深く地蔵菩薩を信じて。靈驗記三巻を記録せらる。次に良観阿闍梨続編十一巻あり」の割注に、「予が所持の本は第一巻は唐の常謹の集なり十二巻あり大同小異なり」⁽¹⁷⁾とある。

この文の解釈は、複数あるうが、常謹集(梅津次郎発見『地蔵菩薩靈驗記』⁽¹⁸⁾)全一卷十良観続編十一巻計十二巻、という解釈も考えられる。また、『寛永寺及び子院所蔵文化財総合調査報告(上)』所収「東叡山本坊文庫惣目録」に「地蔵記 全十二巻」⁽¹⁹⁾とあることも検討すべきであろう。

以上見てきたとおり、江戸時代には、十四巻本とは内容を異にする、十三巻本・十二巻本が存在していた可能性が

あるのである。

(4) 星野俊英所蔵本

星野俊英が所蔵していたもので、「卷之五(人間)」のみ存在する。もとは、地獄・餓鬼・修羅・人間・天道の六巻本であったと考えられている。現存するものを見る限り、続従本とは無関係である。(十四巻本とは共通する説話がある。)文化・文政以後の成立と考えられている⁽²⁰⁾。

(5) 任鑣編本

坂井衡平『今昔物語集の新研究』(一九二三年 誠之堂書店)には、以下のようにある。

此頃又地藏菩薩靈驗記(卷四・五・六)と云へる物あり。高野山宝亀院任鑣の永正九年(二一七二年)引用者註(皇紀)に記せしものにして、続群書類従の同本とは稍似たれども別系の作なり。永観の話、嘉元に失せし忍性の物語など見ゆ。此中巻四のみは良観に就いて一卷の小説的記事を綴りて文学的なり。一に吾妻鏡と呼べり。巻五と六とは之に反して二三十宛の話譚を片仮名交り、事書体に記し、文体稍今昔に似たる所あり。懸詞などの修辞法も見えたり。一帯に奥州話多し。前期に出でし実叡の地藏靈驗記に次げるものならん。(六五七頁)

やや意味の通りにくい文章ではあるが、実睿編『靈驗記』の続編的な任鑣編『地藏菩薩靈驗記』の存在を示唆している

実睿編『地藏菩薩靈驗記』再考(清水邦彦)

る。任鑣編本については、『国史文献解説』等幾つかの辞典にも言及があるが、坂井の記述を超えるものは無い。

(6) 因鳳編本

『地藏菩薩利生記』巻五第一話末には以下のようにある。予この記をかきつづる事。已に数巻におよびしころ。ある人一冊の古書を携来て。予に示。欣然としてこれを見るに。題して地藏菩薩靈驗記とあり。もし世間流布の本かと思れば。さにはあらず。又全書かとおもへば。抜書とあり。凡靈驗の数三十五件。紙数七十二葉。片仮名にして約に書。首には六地藏の名品種子等を記し。終に書いてはいく維時明応拾載辛酉。仲春日。為後人之一覧因鳳書之(略)又その因鳳といひしは。いかなる僧といふ事をしらず。書中のやうす。真言宗と見えたり。(略)この靈驗と。次にのする一条は。流布の靈驗記に見えざれば。ここにこれをのする耳。(略)⁽²¹⁾

残念ながら、このテキストの所在は不明である。

(7) 古浄瑠璃

若月保治『古浄瑠璃の研究』第四巻によると、「地藏菩薩靈驗記」なる古浄瑠璃の一本が存在する⁽²²⁾。御家騒動に地藏の靈驗を絡めたものであり、本校で取り上げる「靈驗記」とは無関係であろう。全五段から成るゆえ、『種彦古浄瑠璃本目録』に「地藏靈驗記 五段」⁽²³⁾とあるものと同本と

考えられる。

(8) 玉川大学図書館所蔵本

玉川大学玉川図書館には、阿波国立江村地蔵院立江寺が編集した『地蔵菩薩靈驗記』が存在する。同寺の地蔵像の靈驗を記したものである。成立年代は不明だが、天保(一八三〇〜四四)年間の話が数話あり、それ以降の成立と考えられる。

(9) 長崎県立長崎図書館所蔵本

長崎県立長崎図書館のHPによると、「地蔵靈驗記二巻 恵達」とする写本が郷土課に所蔵されている。残念ながら、筆者未見。

以上の如く、「地蔵菩薩靈驗記」と称されるテキストは多種に存在する。このことは、本稿の考察の障害となる一方で、ヒントを与えてくれることにもなる。

2. 通説の確認

試みに、今井淑夫編『日本仏教史辞典』(一九九九年 吉川弘文館)を引用する。

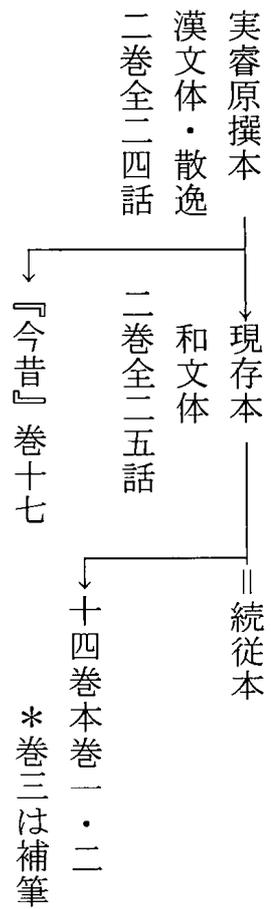
地蔵菩薩靈驗記(一) 地蔵菩薩の靈驗説話集。上巻に九話。中巻に十六話をおさめ、下巻を欠く。巻首に「三井寺上座実睿編集」とある。(略)実睿原撰は漢文

上・下巻二十四話であったが、室町時代初期に中巻第十四話(曾我兄弟の靈出現の話)を増補、その他にも加筆して和訳したものが現存本である。(略)刊本として、『続群書類従』釈家部所収。ほかに、この上巻を巻一、中巻を巻二、下巻(補筆)を巻三として以上は実睿撰、巻四以下巻一四までは室町時代末期良観撰とした同名の書(貞享元年(一六八四)刊)があり、『古典文庫』(略)に影印・解説を収める。(略)(永井義憲筆)

原撰本を「上・下巻」としたこと、良観を室町末期の人としたこと、の2点は問題だが、真鍋⁽²⁴⁾等の先行研究を踏まえた記述である。要点は、以下の4点である。

1. 実睿原撰本は二巻全二四話・漢文体と考えられていること
2. 後に、説話の増補・加筆・書き下しといった改編がなされたのが、現存本Ⅱ続従本であること
3. 十四巻本の巻一・二は続従本の上・中巻を取り入れたものであること
4. 十四巻本の巻三は、補筆であること

なお、試みに通説を図式化すると、以下のようなになる。



ちなみに原撰本の成立時期は、十一世紀前半と考えられてきた。河出書房『日本歴史大辞典』には「製作年代は明確を欠くが、ほぼ一〇三三（長元六）年ごろの成立と考えられる」とある。これは、上巻第一話の冒頭に「後一条院ノ御宇長元六年ノ比。金堂ノ中ニ於テ破壊シタル古キ地藏ヲ見奉リ。（略）実睿修理彩色シテ。別院正法寺ニ安置シ奉リ訖ヌ。」とあることによる。上巻第一話は、編者実睿の体験談であるからこそ、冒頭に配置されたと考えられてきた。

3. 高達説

こうした通説に対して、高達は、続従本の底本（書陵部本）を吟味し、続従本上・中巻は、十四巻本巻一・二（もしくはこれに忠実な写本）を基にしていることを明らかにした⁽²⁵⁾。その主な論拠を以下、挙げる。

まず、上巻第二話「儉田」の箇所が、底本では、「儉由」を朱書きで「田」に直されている。（当然、「田」が正しい。）十四巻本を参照すると、「儉田^{ケンデン}」とあるが、合符のた

実睿編『地蔵菩薩靈驗記』再考（清水邦彦）

め、「田」が「由」に近い形になっている。十四巻本から底本へ筆写の際、字形から「由」とされ、活字化の際に直されたものと考えられる。

第二に、中巻第三話「開口波炎、吐」となっているが意味が通らない。（底本も同じ。）十四巻本を見ると、「炎^{ホノヲ}」となっており、「ヲ」の重複であれば、意味が通る（「口を開き、波に炎を吐く」）。十四巻本から底本へ筆写の際、送り仮名を省略したため、誤りが生じたものと考えられる。

第三に、巻中第十六話で、「墓」となっている箇所が、十四巻本では、「基^{ツカ}」となっている。（文意は「墓」でも「つか」でも通るが、「基」では通らない。）底本を見ると、「基」とある。恐らく、活字化の際に文意を鑑み、「墓」と訂正されたのであろう。

その他、底本と十四巻本との間の一致箇所が多数指摘されている。

ちなみに、底本では、「巻第一」を朱書きにより「上」に訂正した跡、並びに、「巻（第）」を朱書きにより「中」に訂正した跡がある⁽²⁶⁾。

そこから高達は、続従本幻の下巻は、十四巻本の巻三が当てられる予定であったが、編集の過程で紛失した、と考えた。『伊呂波分書目』（慶応年間に成立か？）には「地蔵靈驗記 同 七百十八上／中／下」とあるに対し、『続群書類従目録』では「巻第七百十八／地蔵靈驗記／上中下」と

いう記述に、朱書で「零本 下闕」となっている。『続群書類従目録』朱書の下限は一八七六年である故、一時期は下巻が存在したと考えられるのである⁽²⁷⁾。即ち、十四巻本巻三は、続従本の補筆ではなく、続従本編纂の過程で巻三が欠落したのである。

確かに、底本と十四巻本とは一致している箇所が多く、巻名の問題を含め、高逵の新説は傾聴すべきであろう。

なお、念のため、高逵説を図式化すると、以下のようになる。

十四巻本内包三巻本↓書陵部本⇨続従本

*巻三(⇨下巻) 欠落

4. 通説をどう訂正すべきか

それでは、これまで続従本に依拠してきた、実睿編『地藏菩薩靈驗記』の史料価値をどう解釈すべきであろうか。

というのも先の図式からも分かる通り、高逵は原撰本の問題には、言及していないからである。そこで、高逵説を踏まえて原撰本について私なりに再考を試みたい。

(1) 三巻本の成立

実睿編『地藏菩薩靈驗記』が確認できる最も古い史料は、『覚禅抄』(鎌倉中期頃成立)である。

地藏験記云(実睿撰 惟高夢)一人持香呂。一人合掌

相。一人持宝珠。一人持錫杖。一人持花苞。一人持念珠。其中香呂珠。云々。(『大日本仏教全書』第五五巻 四三頁下段)

ここから実睿原撰本の成立は、少なくとも鎌倉中期まで遡ることができる。また、この記述は、十四巻本巻二第十二話に類似箇所がある。

手ニ執錫杖玉フモアリ、或ハ香炉ヲ持シ、一ハ取念珠テ合掌シ、宝珠ヲ持シ玉フモアリキ。何様、六人ノ御アリサマ別ニコソ見ヘケル。若ハ宝幡ヲ持シ、一人ハ梵篋ヲ持シ給モ有リ。

次に史料で確認できるのは、観智院本『地藏菩薩靈驗絵詞』(十五世紀後半成立)である。

三井実睿地藏験記二巻(二十ヶ四条)(真鍋広済・梅津次郎編『地藏験絵詞集』四四頁)

先行研究では、この記述⁽²⁸⁾と、続従本二巻全二五話との調整が計られ、その結果、続従本から曾我兄弟の話(中巻第十四話)を除けば、巻数・話数が一致する、という結論となった。

しかし、高逵に従えば、続従本が二巻全二五話なのは、三巻目が紛失しているからに過ぎない。我々が、この記述から確認できるのは、室町期において、二巻全二四話の実睿編『霊験記』が存在したこのみである。

それでは、十四巻本に内包される三巻本『霊験記』は何

時頃成立したのだろうか？。この問題の手がかりとなるのは、前述の坂井の記述である。以下、関連箇所を再録する。此頃又地蔵菩薩靈驗記（巻四・五・六）と云へる物あり。高野山宝亀院任鑲の永正九年（二二七二年）に記せしものにして、（略）前期に出でし実叡の地蔵靈驗記に次げるものならん。

実睿編の後編たる任鑲編『靈驗記』が、「巻四・五・六」であるとするれば、その頃（皇紀二二七二年＝西暦一五二二年）に於て、実睿編『靈驗記』は三巻本であったと解釈できよう⁽²⁹⁾。

この解釈は、故なきものではない。先行研究で、所謂“現存本”（＝続従本）→十四巻本、という流れが疑われてこなかったのは、続従本には、室町時代の用法が散在するからである⁽³⁰⁾。ちなみに、続従本の中で、最も新しい年号は、巻中第十話の、文和（一三五二～五六）である。また、十四巻本巻三にも、江戸時代の年号・語彙は見られない。従つて、実睿編（と称される）三巻本は、一五一二年頃には成立しており、これに続く形で、任鑲続編・良観続編の『靈驗記』が作られた、と考えられるのである。これは別に、良弁続編が存在していた可能性もある（前述）。なお、十四巻本に内包される現存三巻本は和文体であり、室町時代の用法が散在する（前述）。従つて、三巻本はもとより和文体であったと想定される。

実睿編『地蔵菩薩靈驗記』再考（清水邦彦）

また、先行研究では、原二巻本に、三巻目が足された、としてきたが、現況では、二巻本と三巻本との関係は不詳とすべきである。（原撰本が二巻本かどうか不明とすべきである。⁽³¹⁾）

（2）原撰本の成立時期

それでは、原撰本の成立は何時頃なのだろうか？。現存する三巻本（十四巻本巻一・二・三）がある程度、原撰本を継承していると想定して論を進める。その論拠は、『覚禅抄』に引用された『靈驗記』と、十四巻本巻二第十二話の記述とが類似していることである（前述）。

「地蔵の引導先」から、成立年代を考察したい。三巻本を見ると、地蔵が西方浄土へ引導する話もある一方、（兜率）天へ引導する話がある。注目すべきは、浄土と天とが“並存”した記述があることである。

其後、尼公ノ夢ニ、大徳悦テ曰ク、「此善力ニヨリテ、彼ノ苦界ヲ出テ、天上ニ生ヲ得タリ。伏シテ願クハ、追善ノ力ニヨリテ、西方ノ浄刹ニ望ミアリ」トゾ申モ果又ニ、夢覚ニケリ。（巻一第九話）

以上の記述は、天よりも西方浄土を上位置付けている。ところが、以下の記述となると、兜率天と浄土とを「混同」していると言いかげない。

其ノ結願ノ夜夢ミラク、「彼ノ善ニ酬テ、今、地蔵薩埵

ト等ク、都率ノ供奉スルモノナリ」ト観喜ノ容顔正シクシテ、光ヲ放テ天上シ給ト思ヘバ覺ヌ。弥々倍增法樂ノ法施ヲ奉リ、自他俱往生樂邦ノ修行ヲ成シケル。

(卷二第十六話)

また、卷三第六話に於て、主人公之春は、母の往生極樂を願っているが、母は、兜率天へ引導されている。

「何ナル追善ヲモ為テ、母ノ孝養ニセン」トテ、(略)「上品蓮台ニ縁ヲ結び、五障三従ノ苦ヲ離テ無垢成仏シ玉ヘ」ト、一心ニ祈玉イケル。(略)彼ノ功德ニヨリテ都

史多天ニ生レタリト、之春ノ夢ニ見ヘ玉イケルトナン。平安中期頃まで、兜率天と西方浄土とは混同されていたが、院政期以降峻別されるようになり、鎌倉時代以降、西方浄土が一般化していった、と言われる⁽³²⁾。鎌倉時代の地藏説話を見ても、天と西方浄土とを混同している話は見当たらない⁽³³⁾。とすると、三巻本の、天と西方浄土とが併存・混同している記述⁽³⁴⁾は、院政期には成立していた原撰本の記述を引き継いでいると考えられる。

特に留意すべきは、卷二第十六話である。同話の舞台は立山であるが、立山は、鎌倉時代以降、阿弥陀信仰との関わりが深くなり、南北朝時代には阿弥陀を立山権現の本地とするに至る⁽³⁵⁾。その立山を舞台とした兜率天上生の記述は、少なくとも院政期のものと考えられるのである。同様のことは、同じく立山を舞台とする卷三第三話に関しても

言える。

彼ノ化菩薩、手ヲ合セ雲ニ乗、地藏ノ御影ニ随イ奉リ、皆天宮ニ飛登テ去ヌ。(略)火中ニ見ヘシ講衆モ、諸共ニ天上スルト見ケレバ、歎喜ノ涙ニ夢覺ニケリ。「サテハ、講演一結ノ衆ヲバ、諸天モ加護シ濟度シ玉フヨ」ト思テ、(略)

それでは『今昔』卷十七の地藏説話との前後関係はどう考えるべきなのだろうか？。確認すべきことは、三巻本には天へ引導する話があるに對し、『今昔』の地藏説話には、天へ引導する説話がなく、いずれも西方浄土へ引導していることである⁽³⁶⁾。というのも、地藏は、そもそも經典に於て、衆生を天へ引導する存在であり⁽³⁷⁾、日本の地藏説話に影響を与えた『地藏菩薩心驗記』(宋代成立)にも天へ引導する話が多数ある⁽³⁸⁾からである。

特に注目すべきは、三巻本卷一第九話では、一旦、昇天しているに對し、『今昔』の類話(第三一話)ではそうした記述がないことである。

尼ノ夢ニ、故祥蓮喜タル氣色ニシテ、(略)尼ニ告テ曰ク、「汝ガ善根ノ力ニ依テ、我レ罪ヲ遁レテ、只今、法花經地藏菩薩ノ助ヲ蒙テ、浄土ニ参ヌ」ト告グ、ト見テ、夢覺ヌ。

速水侑は、以下のように述べている。

『今昔物語』収録の弥勒上生信仰説話についてみると、「日本霊異記」「法華験記」からの引用が大部分で、「法華験記」編述（一〇四〇）以後形成された可能性ある弥勒信仰説話はほとんど認められぬ。（略）「法華験記」が完成した長久年間以後、「今昔物語」が編された嘉承年間までの六十余年間、民間では、弥勒上生説話のあらたな形成と流布がほとんど行われなかったことを、示しているのではあるまいか。³⁹⁾

とすると、兜率天上生説話を含んでいたであろう原撰本は、『今昔』より前に成立したと考えられるのである。また、これまで、原撰本の成立は、巻一第一話に於ける編者実睿の記述から、十一世紀前半と考えられてきたが、『法華験記』と同時代という点からも首肯されよう。

(3)『今昔』の地藏説話との関係―三巻本に類話がある話
 これまでの通説では、『今昔』巻十七の地藏説話の大典に、続従本の基となった、散逸原撰本を想定してきた。その論拠として、『今昔』巻十七に、『覚禪抄』に引用された原撰本を書き下したと判断される箇所があるからである。以下引用するので、先に挙げた『覚禪抄』の該当箇所と読み比べてほしい。

一人ハ手ニ香炉ヲ捧タリ。一人ハ掌ヲ合セタリ。一人ハ宝珠ヲ持タリ。一人ハ錫杖ヲ執レリ。一人ハ花管ヲ

実睿編『地藏菩薩霊験記』再考（清水邦彦）

持タリ。一人ハ念珠ヲ持タリ。其ノ中ニ、香炉ヲ持給ヘル小僧（略）（第二三話）

通説では、続従本二巻全二五話が、原撰本二巻全二四話を凡そ継承していると考え、その上で、続従本と『今昔』とで類似する話については、原撰本を『今昔』の大典としてきたのである。以下、対照を示す。

『今昔』巻十七第一話―	三巻本巻一第三話
第二話―	巻一第五話
第五話―	巻一第二話
第八話―	巻一第七話
第十話―	巻一第七話
第十二話―	巻一第一話
第十四話―	巻一第十話
第十五話―	巻一第十一話
第十六話―	巻一第八話
第十七話―	巻一第十三話
第十八話―	巻一第八話
第二一話―	巻一第一話
第二二話―	巻一第九話
第二三話―	巻一第十二話
第二五話―	巻一第四話
第三一話―	巻一第九話
第三二話―	巻一第六話

高達に従えば、続従本が二卷全二五話なのは、卷三が欠落したからに過ぎず、原撰本を継承している訳ではない。従って、(続従本の底本である)三卷本と『今昔』と類似する話が原撰本を出典とするかどうかは再考すべきである。但し、原撰本以外に、『今昔』に先行すると想定される地蔵説話集—散逸史料も含め—は確認されない⁽⁴⁰⁾。従って、現時点では、三卷本と類似するものについては、出典の第一候補として原撰本を想定すべきであろう。しかし、後述の通り、別史料が出典であった可能性は残る。

(4)『今昔』の地蔵説話との関係—三卷本に類話のない話問題は、三卷本に類話のない話である。これらの話の類話が十四卷本の良観続編箇所であり、特に卷六に多い。以下、対照を示す。

『今昔』卷十七第三話—十四卷本卷六第十一話	第四話—	卷六第十二話
第六話—	第六話—	卷六第十七話
第七話—	第七話—	卷六第二一話
第九話—	第九話—	卷六第十話
第十一話—	第十一話—	卷六第九話
第十三話—	第十三話—	卷六第十三話
第十九話—	第十九話—	卷六第五話
第二十話—	第二十話—	類話無し

第二四話—	卷九第一話
第二六話—	卷四第四話
第二七話—	卷六第四話
第二八話—	卷六第十六話
第二九話—	卷十四第八話
第三十話—	卷十四第七話*但し、別話とすべき

良観続編箇所に類話がある話について、小学館『日本文学全集』でも岩波書店『新日本文学大系』でも「出典は『散佚原地蔵菩薩靈驗記』か」といった表現と取っている。(第二十話は、両書とも「典拠(出典)未詳」とし、第三十話は、『日本文学全集』では「典拠は未詳」、『新日本文学大系』では、「出典は散佚地蔵菩薩靈驗記」としている。)

こうした注釈の背景には、原撰本は全三巻で、続従本に収録されなかった幻の下巻が十四卷本(特に卷六)に吸収されたとする説がある⁽⁴¹⁾。

しかし、高達によって、幻の下巻は、十四卷本卷三であったことが判明した。従って、良観続編箇所との類話の出典を安易に原撰本に求めるべきではない。

だが、和文体三卷本への改編・或いは書写の際、原撰本から欠落した話が存在する可能性もある。前述の如く、『今昔』の地蔵説話の出典となる可能性のある説話集は、

現状では原撰本のみである。原撰本の形態が不明な以上、従来「出典未詳」とされてきた第二十話も含め、三巻本に類話のない話の出典が原撰本であった可能性も十分残っている。

と同時に、仮に三巻本が十四巻本に内包されなければ、実睿編『靈験記』が書名のみ伝わる幻の書となった可能性が高い。従って、『今昔』が、今日に伝わらない史料を出典としている可能性も多分にある。前述の如く、「地蔵菩薩靈験記」という名称は普通名詞であるため、仮に別史料を出典としていたならば、それは実睿編とは別の『地蔵菩薩靈験記』だったかもしれない。

結び

以上を踏まえると、実睿編『地蔵菩薩靈験記』に関する通説を改め、以下のように説明すべきであろう。

1. 実睿編『地蔵菩薩靈験記』が最初に確認できるのは、『覚禅抄』（鎌倉中期頃成立）だが、 \wedge 現存する、改編を受けたV十四巻本内包三巻本（ \downarrow 続従本）の記述から、原撰本は、十一世紀前半に成立していたと考えられる。ゆえに、これまでの通説通り、『今昔』巻十七の出典として、原撰本が想定される。（但し、三巻本と類話がない話もあるため、現状では確認されない史料を出典としていた可能性も残る。）

実睿編『地蔵菩薩靈験記』再考（清水邦彦）

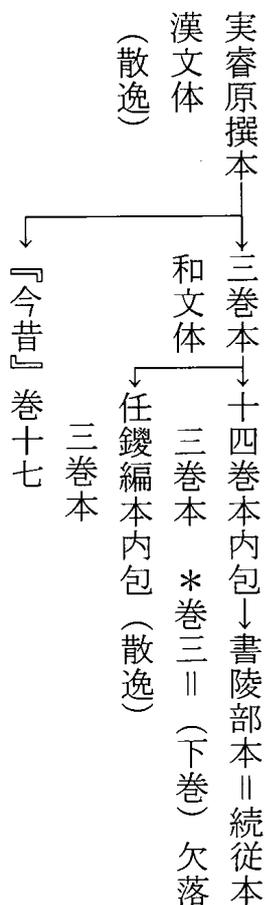
また、『覚禅抄』に於ける引用から、原撰本は漢文体であったと考えられる。

2. 観智院本『地蔵菩薩靈験絵詞』から、室町時代には、二巻全二四話の形態であったと確認される。
3. 坂井衡平の記述から、室町後期には、三巻本が成立していたと考えられる。この三巻本に増補する形で、任鏝編・良観編等の『靈験記』が成立した。三巻本は、もとより和文体であったと考えられる。

4. 三巻本を底本として、続群書類従本が編纂され、その際、上・中・下巻に巻名が変更される予定であった。但し、編纂の過程で、巻三が欠落してしまったため、上・中巻という変則的三巻本となってしまった。

これまでの通説では、続従本を内包・増補する形で十四巻本が成立したとされてきたが、高逵による底本の検討結果から通説は否定される。

試みに図式化すると、以下のようなになる⁽⁴²⁾。



室町時代に於ける「二卷全二四話」の形態は、原撰本とも、三卷本とも関係が不明なため(前述)、この図式からは省略せざるをえなかった。

- (1) 卷十七全五十話のうち、地蔵説話は、第一話から第三二話まで。また、これ以外に、『今昔』には、地蔵が登場する説話が二話ある(卷六第三三話・卷十三第十五話)。
- (2) 巖密には、卷一・二の冒頭には「三井寺上座実睿編集」とあるに對し、卷三の冒頭には「三井寺 実叡撰」とある。後述(註31)のように、卷三の成立には、留意すべき点もあるため、単なる表記の違いと看過すべきではないが、本稿では問題を指摘するに留める。
- (3) 安藤直太郎「今昔物語集・卷十七・出典考」(『国語・国文』一九卷一号一九五〇年)・日本古典文学大系『沙石集』渡辺綱也筆・補注八六
- (4) 鶴見充展「翻刻『延命地蔵菩薩經和談鈔』(一)」(『東洋大学大学院紀要』第二二号一九八六年)一六一頁
- (5) 大谷大学図書館本より引用。渡浩一の指摘による。渡「二四卷本『地蔵菩薩靈驗記』解説」(榎本千賀・他編『二四卷本地蔵菩薩靈驗記(下)』二〇〇三年 三弥井書店)三五―三五二頁
- (6) 栃木県郷土文学研究会翻刻(『国語―教育と研究―』一四号 一九七四年)三三頁上段
- (7) 拙稿「地蔵の名字・再考」(『北陸宗教文化』第一二号 二〇〇〇年)
- (8) 卷十三第二話の末尾には、「其ノ六所ハ人々存知ノコトナレバ、記スニヲヨビ侍ズ。」とある。京の六地蔵巡りは一旦戦国時代に廃れ、現代に続くものは江戸時代前期に始まったとされる。真鍋広済『地蔵菩薩の研究』(一九六〇年 三密堂書店)四二頁・森成元「近世の地蔵信仰―特に京・大坂を中心として―」(『尋源』三四号 一九八三年、真野俊和編『講座 日本の巡礼 第一卷本尊巡礼』一九九六年 雄山閣再録)
- (9) 渡は、十四卷本卷三の奥書に、「良観上人統之撰靈驗記」とあることから、良観は続編部分の編者に過ぎず、十四卷本そのものは、別人の再編と考えるべきとする説を唱えた。「二四卷本『地蔵菩薩靈驗記』解説」(前掲)三五―三五三頁・後述のように、別形態の良観続編の存在が示唆されるゆえ、首肯すべき見解である。
- (10) 真鍋「『地蔵菩薩靈驗記』に就いて」(古典文庫『三因縁地蔵菩薩靈驗記(1)』解説 一九六四年)二六頁
- (11) 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』第一卷(一九六二年 井上書房)二四一頁第三段
- (12) 『大日本仏教全書』九六卷二二頁中段
- (13) 真鍋「『地蔵菩薩靈驗記』に就いて」(前掲)二七―二八頁
- (14) 大谷大学図書館本より引用。
- (15) 岩城隆利編『増補元興寺編年史料 中卷』(一九八三年

吉川弘文館)に収められる「萬杯供養奉加結縁交名状」(文永五年)には、「良弁」の名がある(九三頁)が、本稿でいう良弁と同一人物とするには時期的に早いと思われる。

- (16) 真鍋「地蔵菩薩靈驗記」に就いて(前掲)二六頁
 (17) 『真言宗安心全書卷下』(一九一四年 六大新報社)七二八頁

- (18) 『大和文化研究』(一〇一号 一九六六年)に所収、梅津次郎『繪巻物叢考』(一九六八年 中央公論美術出版)に再録。

- (19) 東京都庁生涯学習部文化課編『寛永寺及び子院所蔵文化財総合調査報告(上)』(一九九九年)二〇七頁

- (20) 真鍋広済『地蔵菩薩の研究』(一九六〇年 三密堂書店)一六〇〜一六一頁

- (21) 大谷大学図書館本より引用。渡浩一の指摘による。渡「四卷本『地蔵菩薩靈驗記』解説」(前掲)三五八〜三五九頁

- (22) 若月保治『古浄瑠璃の研究』第四卷(一九四四年 桜井書店)九一〜九一三頁

- (23) 『近世書目集』(一九八九年 日本古典文学会)一五九頁

- (24) 真鍋「地蔵菩薩靈驗記」に就いて(前掲)
 (25) 高達「一四卷本地蔵菩薩靈驗記解説」(榎本千賀・他編『一四卷本地蔵菩薩靈驗記(下)』二〇〇三年 三弥井書店)三六七〜三八一頁

- (26) 高達「一四卷本地蔵菩薩靈驗記解説」(前掲)三七八〜

実睿編『地蔵菩薩靈驗記』再考(清水邦彦)

三七九頁

- (27) 高達「一四卷本地蔵菩薩靈驗記解説」(前掲)三六九〜三七〇頁・但し、周知の通り、群書類従には欠巻が多いので、もともと無かった可能性も否定できない。しかし、目録上とは云え、古くは三巻本と認識されていたことは留意すべきであろう。

- (28) 『日本仏教史辞典』で、原撰本を「上・下巻」としていたのは、この史料による。しかし、「二巻」としか記されていない以上、巻名が「上・下」であったかは不明である。

- (29) 既に渡浩一の指摘がある。渡「一四卷本地蔵菩薩靈驗記解説」(前掲)三五九頁

- (30) 真鍋「三井寺上座実睿編集『地蔵菩薩靈驗記』再攷」(『龍谷大学論集』三五二号 一九五六年)

- (31) 但し、巻三に追加部分が多いことは認められる。その主な根拠は、巻三には、『今昔』の地蔵説話との類話がないこと(本文後述)、巻三には、「検断」(第四話)・「和利」(第五話)といった中世用語が話の中に散見することの2点である。註(2)で指摘した表記の問題も気になる。但し、本文でも述べた通り、巻三には古い表現もあり、単純に巻三が増補されたとは言えない。

- (32) 平岡定海『日本弥勒浄土思想展開史の研究』(一九七七年 大蔵出版)一三〇頁・速水侑『弥勒信仰』(一九七一年 評論社)一〇七〜一六二頁・荒川紘『日本人の宇宙観』(二〇〇一年 紀伊国屋書店)一一二頁

- (33) 管見に及んだものとして、『宇治拾遺物語』巻一第十六話・『古事談』巻三第三二話・『発心集』巻三第六話・『私聚百因縁集』巻五第十三話・『撰集抄』巻九第三話・『元亨釈書』巻九第十五話・第二二話・巻十七第三二話・巻十八第十一話が挙げられる。『元亨釈書』巻九第十五話を除き、いずれも西方浄土へ引導している。『元亨釈書』巻九第十五話は「天上」へ引導・なお、地蔵説話収集に当たっては、渡浩一「中世地蔵説話概観」(『東洋学大学院紀要』二〇号 一九八四年)を基とした。
- (34) もつとも、こうした記述は、改編の過程で生じた可能性もある。しかし、浄土の記述が後から足されたとする、その時期は鎌倉時代以降であろうから、その場合でも原撰本の成立は院政期を下限とすべきであろう。
- (35) 福江充『立山信仰と立山曼陀羅』(一九九八年 岩田書院)一八二〜一八三頁・但し、寛喜二年(一二三〇)在銘の立山禅頂仏(立山神像)は帝釈天の姿であり、天との結びつきが鎌倉時代に一切消滅してしまった訳ではない。廣瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』(一九八四年 桂書房)五頁
- (36) こうした地蔵と西方浄土との結びつきは、註(38)にある通り、『応驗記』にあり、また、スタインが敦煌で発見した『地蔵菩薩経』(大正蔵第八五巻)にも見られ、日本独特のものではない。この結びつきが日本に定着した一因として、良源による阿弥陀五尊(三尊+地蔵+竜樹)像の安置(於横川常行堂)が挙げられる。石田一
- 良『浄土教美術』(一九九一年 ペリかん社)三四〇〜三四三頁・速水侑『平安貴族社会と仏教』(一九七五年 吉川弘文館)二一四〜二一六頁・なお、阿弥陀五尊形式は経軌になく、石田は、「良源が当時の宋国の新風にならって創めたものであろう」(前同三四〇頁)と述べている。やや時代は下るが、『応驗記』第三十話にこの五尊形の記述があるので、石田の見解は首肯される。
- 今回、良源関連の史料を幾つか見たところ、良源が円融院の発願により六地蔵像を造立した記事が目にとまった。『慈恵大僧正拾遺伝』というのもこれが信頼の於ける記述であるならば、六地蔵の最も早い史料となるからである。(もともと六地蔵は経軌になく、日本独特のものと考えられてきた。)地蔵研究では、これまで良源については重視されてこなかった。今後、こうした研究も必要であろう。
- (37) 『地蔵本願経』には、「地蔵の形像を作り、焼香し、供養し、礼拝し、讚歎せば、是の人の居處に即ち十種の利益を得ん。(略)三には先亡天に生じ」(『国訳一切経』版二四九頁)・「若し未来世に善男子、善女子有つて地蔵の形像を見、及び此の経を聞き乃至誦誦し、香華、飲食、衣服、珍宝をもつて布施し、供養し、讚歎し、瞻礼せんもの二十八種の利益を得ん。(略)十四には多くは天上に生じ」(前同二五八頁)とある。
- (38) 全三二話のうち、第四・六・十二・十三・十五・十九・二十話の計七話。但し、西方浄土へ引導する話もある

(第九・十一・十四・二六話)。

(39) 速水『弥勒信仰』(評論社 一九七一年) 一三七頁

(40) 留意すべきは、『宝物集』巻四に引用される「地蔵の験記」である(新日本古典文学大系版一八〇頁)。しかし、

当該の地蔵像(六波羅蜜寺)と同一と考えられる像の靈驗譚が『今昔』巻十七第二一話にあるが、まったく内容は異なる。従って、『今昔』巻十七の編者は、「地蔵の験記」を見ていなかったと推測される。小林剛「六波羅蜜寺の地蔵菩薩立像について」(『大和文華』二七号 一九五八年)

(41) 安藤直太郎「今昔物語集・巻十七・出典考」(前掲)・片寄正義「地蔵菩薩靈驗記」(『今昔物語集の研究下』一九七四年 藝林舎)・真鍋「『今昔物語』と『地蔵靈驗記』」(『文学・語学』七号 一九五八年)・但し、後に真鍋はこの考えを改め、原撰本を二巻全二四話とし(註24)、これが本稿で言う通説の基となる。

(42) 念のため、確認しておく、本稿のまとめ・図式は、高達の発見(十四巻本内包三巻↓書陵部本Ⅱ続従本)を起点に、清水が通説の訂正を試みたものである。従って、その責任は清水にある。

*史料の引用にあたり、論旨に差し障りの無い範囲で異体字・旧字を直した箇所がある。(へ)内は、原文割註。

*十四巻本(『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』)については、榎本千賀・他編『一四巻本地蔵菩薩靈驗記(上)・(下)』(二〇〇〇

実睿編『地蔵菩薩靈驗記』再考(清水邦彦)

二・二〇〇三年 三弥井書店)より引用。また、十四巻本の解釈についても同書に頼るところが大きかった。

*『今昔物語集』は小学館『日本古典文学全集』を使用。

*大日本仏教全書は鈴木学術財団版を使用。

*『慈恵大僧正拾遺伝』は、櫛田良洪が『仏教史研究』八号一九七四年に活字化したものを使用。史料価値については、櫛田「慈恵大師伝の新資料について」(『印度学仏教学研究』十四―二、一九六六年)参照

【キーワード】

地蔵菩薩靈驗記、実睿、任鑲、

三国因縁地蔵菩薩靈驗記、群書類従